

釧路市・清野写真館旧蔵写真 —2017年度新収蔵資料の紹介—

小川正人・大坂 拓

- 目次 1 はじめに
2 清野写真館について
3 資料の特徴

Key Words 絵葉書、写真、アイヌの木綿衣

1 はじめに—資料の概要と寄贈の経緯—

本稿は、北海道博物館が2017（平成29）年12月に登録を終えた標記の写真資料について、その概要と特徴を紹介するもので、対象となる資料は、釧路市にあった清野写真館旧蔵のものと推定される写真9点と絵葉書1点である。

写真・絵葉書計10点の画像は本稿に写真1～10として掲載した。原版のサイズは個々に若干の差異はあるが、おおそ長辺14cm×短辺9cmである。写真には全て裏面に台帳もしくはアルバムから剥がしたような痕を確認できる。

絵葉書の写真には「屈斜路湖畔コタンアイヌと熊」「砂場キャンプ村」とのキャプションが付されている。紙面には発行者名等は印字されていない。

これらの資料は、2015（平成27）年9月に、新潟県長岡市在住で、清野写真館を営んでいた清野市郎氏の孫に当たる田淵史忠氏より寄贈の申し出を受けたものである。

田淵氏は、その後間もなくしてこれらの写真の現物をひとまず当館にご提供下さった。また、その際添えられていた書状によれば、同氏の記憶では「写真館のショーウィンドウにアイヌの方々を撮影した写真が飾っていた」という。後述するとおり同館発行の写真帖にもアイヌ民族を撮影した写真が掲載されているので、「祖父が自分で撮影したものと推測しています」との田淵氏の言は、確かにその通りだと考えられる。

このようにせっかく早期に資料を提供いただき、また大事な情報をお知らせいただいていたにもかかわらず、当初は、当館のリニューアルから間もない時期だったことなどから、暫くの間、お預かりした写真の内容を十分に

を確認しないまま歳月を経過させてしまった。2016（平成28）年1月に至って、大坂が、写真の中に当館所蔵久保寺逸彦文庫中にあるアイヌ文学研究者・久保寺逸彦（1902～1971）が1954（昭和29）年に釧路市で撮影したとされる写真に写っているものと同一の木綿衣が着用されているものがあることを確認（この点については「3」で詳述する）、これがきっかけとなって、小川と大坂がそれぞれに、関連する写真や周辺資料の調査に着手した。ここまで資料の登録が遅れたことを、先ず田淵氏に深くお詫びするとともに、ここにこれらの写真の概要を紹介し、これらが1920～30年代の釧路地方の記録として、アイヌ文化・アイヌ史上に重要な意義を有することを報告する。

本稿は、「1 はじめに」「2 清野写真館について」及び「3 資料の特徴」のうち「(2) 絵葉書との対比」までを小川が、以降は全て大坂が執筆を担当し、それぞれの脱稿後に、両方で全体を確認し記述の統一等の調整を図った。

当館アイヌ民族文化研究センターでは、これまでも、当該年度に新たに登録した資料の中から、特徴ある資料の紹介を行ってきた（大坂2015、同2016）。本稿を含め、今後とも研究センターとしてこの取り組みを継続していきたい。

2 清野写真館について

釧路市の市制十周年記念写真帖編纂会が1932（昭和7）年12月に発行した、同市の『市制十周年記念写真帖』の奥付には「編纂兼撮影者」として清野市郎氏の名がある。この写真帖には、写真2とほぼ同じ写真が掲載されており（写真11）、今回寄贈を受けた写真が同氏の撮影

によるものであることを傍証してくれる。また、写真帖の性格からすれば、比較的直近の写真を掲載すると考えられるので、少なくとも写真2ならびにこれと同じ家屋や人物が撮影されている写真（家屋や人物の比較検討については「3」で述べる）はこの時期に撮影されたものと推測できる。



写真11 『市制十周年記念写真帖』より
写真2と対比すると、若干であるが周囲がトリミングされている。

同書が掲載する清野市郎氏の住所は「釧路市米町1丁目45」である。同年6月発行の『大日本職業別明細図』第286号（釧路市）を見ると、確かに米町1丁目に「清野写真館」がある（写真12）。



写真12 『大日本職業別明細図』第286号より、釧路市米町1丁目付近赤い矢印のところに「清野写真館」がある。

このほか、現在までに確認できた清野写真館の出版物には、釧路市の『市制三〇周年記念写真帳』（1952年）がある。また、今回紹介する写真を使用したと考えられ

る絵葉書も複数枚確認できるので、同館撮影・発行の絵葉書もあったと推定できる。

田淵氏によれば、同館は昭和40年頃まで営業していたとのことであるが、開業及び閉店の時期は確定できていない。

3 資料の特徴

(1) 「春採懐古館」と推定できる写真



写真13 『釧路新聞』1928年11月20日付け2面掲載写真。

1928（昭和3）年11月20日付け『釧路新聞』は、「御大典を記念する／草堂春採懐古館」との見出しで、春採のアイヌの「宝物を収蔵陳列する」として「春採懐古館」なる施設が開設されたことを報じ、このとき行った「記念撮影」のものと思われる写真を掲載している。

写真1～9に写っている家屋や倉は、その形状などから、この春採懐古館であると考えられる。このことは、写真1～9が撮影された場所などを特定できる⁽¹⁾とともに、これらの写真が、同館の建物や周囲の状況を知る資料としても重要な意味を持つことを示してくれる。

(2) 絵葉書との対比

次に絵葉書との対比を確認しておく。各地の図書館等で公開されている絵葉書のうち、筆者らがこれまでに確認できたものは極めて限られているが、それらの中では、道立図書館が所蔵する「金田一京助旧蔵アイヌ絵葉書」として一括されている絵葉書277枚に含まれる「釧路市春採土人（アイヌ）」というシリーズタイトルを確認できる一連の絵葉書⁽²⁾の中に、本資料とほぼ同一と考えら

小川正人・大坂 拓：北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

(1) 上記の『釧路新聞』記事によれば、春採懐古館は「部落公会堂前に建築」されている。

(2) 北海道立図書館所蔵「金田一京助旧蔵アイヌ絵葉書」（請求番号エー0ーベツ）中に「釧路市春採土人（アイヌ）」というシリーズタイトルを確認できる絵葉書は9枚確認できる。それぞれに「其二」～「其四」「其七」～「其一二」までの連番があることから、全12枚ないしそれ以上の絵葉書の一部と推定できる。以下これらの絵葉書を個別に指すときは、「其二」「其三」等の呼称を用いた。

れるものや、同じ時に同じ場所で撮影したと考えられるものを確認できる。

具体的には、絵葉書「其三」は写真6と同じものと考えられ、絵葉書「其十」は写真5と同じ家屋の前で撮影され、前列の人物の衣服等も同じであることから、同じときに撮影されたと推定できる。

これらの絵葉書そのものからは、発行者、発行年等の記載を確認できない。しかし本資料との対比を通して、これらが釧路のものであり、春採懐古館開設当時のものであると推定でき、これによって、この絵葉書について、またこの絵葉書と関連するその他の資料についても、さまざまな情報が加わることになり、釧路地域のアイヌ史・アイヌ文化の知見をより深めることが可能になるだろう——本資料の意義の一つはこのような点にある。

(3) 寄贈写真中で着用されている木綿衣の特定

被写体となった人々が着用している着物の中には、木綿製と見られる和服や、小袖の可能性のあるもの（写真8）のほかに、刺繍によって文様が施されたものが少なくとも6点確認され、うち5点は文様の構成を把握することができる。

5点のうち1点は写真1・2で中央に座する男性が着用しているもので、写真7で黒か紺の木綿地と思われる生地、2色の糸で刺繍を施していることが確認される。児玉らによる分類の「無切伏刺繍衣」に該当する。残る4点は女性が着用しているもので（表1）、いずれも「色裂置文衣」に該当する。

表1 衣服と着用者の対応関係

	写真2	写真4	写真5	写真6	写真9
色裂置文衣①		右端	前列左から一人目	右側女性	
色裂置文衣②		左端	前列左から三人目		
色裂置文衣③		左から二人目	前列右端		
色裂置文衣④	後列左から二人目	左から三人目	前列左から二人目		中央女性

(4) 関連する問題

特定した衣服のうち「色裂置文衣」は、管見の限り、現在刊行されている博物館等の図録で収蔵が確認できるものはなく、いずれも現在の所在は不明となっている。

色裂置文衣①は、1954（昭和29）年に久保寺逸彦が釧路を訪問した際に撮影した写真の中で、白糠町に住ん

だ四宅ヤエ氏が着用していることが確認された（写真14）⁽³⁾。また、同年1月17日に川湯温泉で撮影されたとされる写真では、写真4右端と同一人物の可能性が高い人物が着用している姿も確認されることから（山本多助を語り継ぐ会2003：5）、この衣服が1950年代前半までに釧路市周辺に存在したことが確認できる。色裂置文衣②については、1947年にNHK『アイヌ歌謡集』の録音に際して撮影された写真の中に確認される（山本多助を語り継ぐ会2003：3）。これらの事例から、色裂置文衣が1920～50年代の釧路市周辺に複数存在し、着用されていたことを伺うことができる。

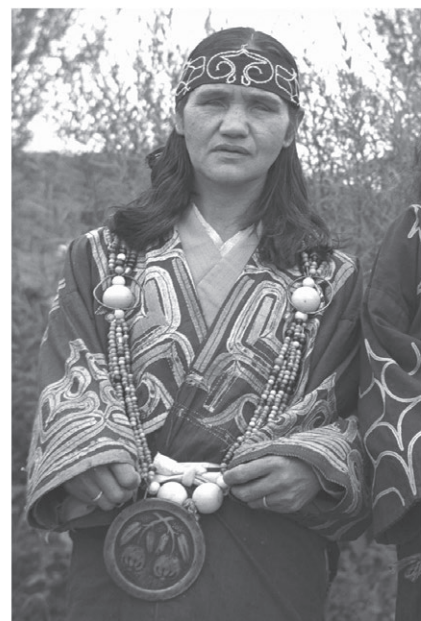


写真14 四宅ヤエ氏（1954年 久保寺逸彦 撮影）

確認された色裂置文衣のうち、文様の構成が確認できる①～③は、北海道大学植物園・博物館所蔵資料など、戦前に噴火湾岸で収集されたことが確実な資料⁽⁴⁾とは異なり、L字形の切伏を配置し、周辺を埋めていく特徴的な文様配置が認められる。これは、白糠で収集され⁽⁵⁾、現在は釧路市立博物館に所蔵される資料（佐々木他2017）との類似を指摘することができる。

津田命子は、釧路市博物館所蔵資料について、ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館所蔵資料2点と比較し、技法の特徴からアイヌ民族の木綿衣の中でも相対的に古いものと位置づけられることを指摘している（佐々木他2017：18-20）。本稿で確認し

(3) 被写体が四宅ヤエ氏であることについては、平良智子氏よりご教示を受けました。ご教示賜ると共に本稿への掲載についてもご快諾下さったことに感謝申し上げます。同日に撮影された写真では、他の人物が同じ衣服や首飾りを着用していることも確認されることから、当日の所有者から借用した可能性がある。

(4) 資料番号4、8、20～22、24～26、35。

(5) 「博物館見て歩く記 二」『釧路新聞』1941年4月26日付

た写真資料は、年代的に古い可能性が指摘されている釧路市博物館所蔵の木綿衣に、いくつかの特徴が類似する資料が、1920～30年代の北海道東部に複数存在した事実を示すものとして極めて重要である。

釧路市博物館所蔵資料の製作地については、噴火湾沿岸で製作されたものが広域に流通したものの推測も加えられているが、そう考えるためには、20世紀前半に認められた地域差の枠組みが、ほぼそのままの形で2世紀にわたって年代学的に遡及することを前提にしなければならず、その他にも、いくつかの可能性を考慮しておく必要がある。

筆者は、もう一つの仮説として、古い時期には釧路市博物館所蔵資料に類似した木綿衣が太平洋沿岸に広く分布しており、その後、「白布切伏文衣」が日高地方を中心に盛行したことで、分布域が分断されたという可能性を指摘しておきたい。

本稿で取りあげた写真資料に収められた木綿衣が、戦前に噴火湾沿岸で収集された資料とは異なる文様構成を示すことや、日高東部の浦河町で釧路史博物館所蔵資料に類似した木綿衣が収集されていること⁽⁶⁾、隣接する類似町でも、類似した技法の木綿衣が着用されていた事実は（熊谷編2015：26）、従来の地域差の認識からは説明が困難だったが、古い段階に太平洋沿岸に広域分布していたとすれば、一部の資料が20世紀まで残存し、また、一部では新たに製作され続けていたものとして合理的な説明が可能になる。

アイヌ衣文化研究の年代学的変化については、津田が提示／実践した技術論的分析方法によりその端緒が開かれた段階にあり、今後、網羅的な資料の分析によって多くの課題と可能性が浮かび上がってくるだろう。

謝辞

今回、清野写真館及び釧路の絵葉書について多大なご教示を賜った釧路市立博物館の戸田恭司氏、資料の閲覧等にご高配を賜った帯広市図書館及び北海道立図書館北方資料室、そして写真の内容について多大なご教示を賜り、本稿への掲載をご快諾下さった山本文利氏、山本栄子氏ご夫妻、平良智子氏に、この場を借りて深くお礼申し上げます。

参考文献

大坂拓 2016. 北海道乙部町伝世の木綿衣ほかー平成27年度新収蔵資料の紹介ー. 北海道博物館アイヌ民族

文化研究センター研究紀要 1: 79-84.

大坂拓 2017. 千島アイヌのハマニンニク製容器ー平成28年度新収蔵資料の紹介ー. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 2: 99-102.

熊谷カネ 2015. 岡田コタンの暮らし（平成26年度公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構研究助成事業報告書）.

佐々木史郎・吉本忍・齋藤玲子・津田命子・日高真吾・和高智美・右代啓視・戸田恭司 2017. 釧路市立博物館所蔵アイヌ木綿衣について. 釧路市立博物館研究紀要 37: 17-28.

山本多助を語り継ぐ会 2003. 阿寒国立公園とアイヌの伝説（復刻版）.

(6) 浦河町立郷土博物館資料番号002377



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



屈斜路湖畔コタンアイヌと熊

砂湯ギヤンブ村



写真10



写真15 (絵葉書「其二」)



写真16 (絵葉書「其十一」)

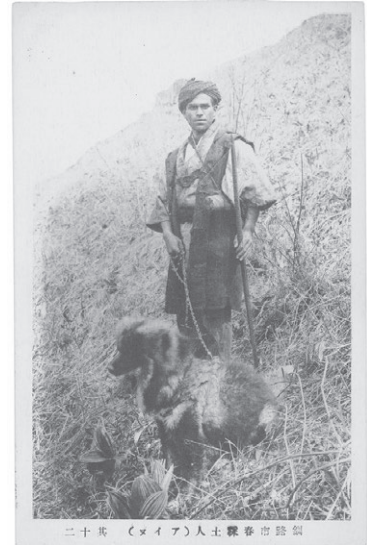


写真17 (絵葉書「其十二」)



写真18 (絵葉書「其三」)

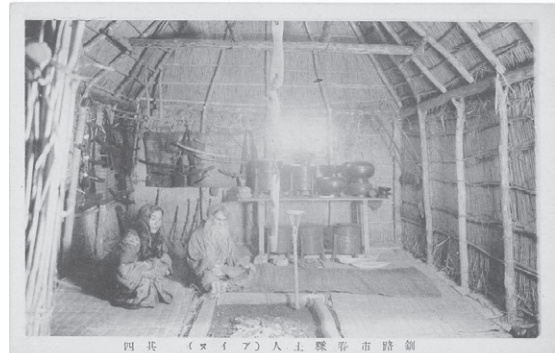


写真19 (絵葉書「其四」)



写真20 (絵葉書「其七」)



写真21 (絵葉書「其八」)



写真22 (絵葉書「其九」)



写真23 (絵葉書「其十」)

Photographs of the Former Kiyono Photo Studio Collection in Kushiro City

OGAWA Masahito, OSAKA Taku

This article reports on a summary of the photographs in the collection of the former Kiyono Photo Studio, which was located in Kushiro City. The photographs were among the materials registered by the Hokkaido Museum in fiscal 2017.

All these photographs appeared to be taken at "Harutori Kaikokan", an exhibition facility of the traditional houses and daily tools of the Ainu established in 1928 in Harutori, Kushiro City. Therefore, the photographs are significant as records on what exhibition facilities of the traditional Ainu culture in

the 1920-1930s were like, as well preserving aspects of the material culture in the Kushiro area at that time.

Additionally, more than one piece of clothing in the photographs was confirmed to have the same characteristics as Ainu cotton clothing currently regarded as the oldest in existence, and which is owned by the Kushiro City Museum. From these observations, obtaining new knowledge on clothing regarded as the oldest is thought possible.